

# Nara Women's University

## ドイツの社会学教科書とシラバスに見るデュルケーム:社会学の方法論と主題設定に関して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-11-02 キーワード (Ja): ドイツ語, 古典家, 社会学教科書 キーワード (En): 作成者: 梅村, 麦生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/5518">http://hdl.handle.net/10935/5518</a>

# ドイツの社会学教科書とシラバスに見るデュルケーム ——社会学の方法論と主題設定に関して——

梅村 麦生

はじめに——社会学のディシプリンと「古典家」

本稿は、社会学のディシプリンにおける「古典家」の意義について、特にドイツの社会学教科書とシラバスにおけるデュルケームとその学説を対象として取り上げて検討する。

まず、なぜ社会学教育において「古典家」が言及されるのかに関して、ドイツ語圏で社会学理論と社会学史の教科書として用いられているテキストの编者による説明を紹介しておく。Kröhnke (2012: 5) は「古典家たちに取り組むことは、この学問分野の歴史を跡づけるために必要」であることに加えて、「社会学の古典家たちによる問題と問題設定は、経験的研究と学問的な理論形成において中心的な導きの線を示して」おり、「彼らが発展させた概念体系はパラダイム的なもの」となっていることから、学生たちが「あまりに広くて…カノン化が欠けている」「社会学というジャングルの中で見通しを失わないため」に「古典家たちに習熟すること」が導きの糸になると記している。また Kruse (2012: 15-17) は、社会学者にも社会学の歴史を学ぶことに懐疑的な見解もあるとしたうえで、なぜ自分たちのディシプリンの歴史に取り組むのかについて、カール・マンハイムの知識社会学にも言及しつつ、存在被拘束的ないし時代被制約的な学問としての社会学というディシプリンの発展を歴史的な脈から理解することを社会学史の目的の第一に挙げ、さらに今日なおアクチュアリティをもつ「古典家」と呼ばれる過去の社会学者たちの研究を、この分野の「古典」となった知識在庫として内外に知らしめることをも狙いとして挙げている<sup>1)</sup>。

それでは、そうした「古典家」は社会学教育のなかでどのように導きの糸として参照されているのか。本稿ではデュルケームとその学説を例に、以下で検討していくこととする。

## 1 社会学教育におけるデュルケーム——日本とドイツの社会学理論と社会学史を中心に

本節では大学の社会学教育におけるデュルケームの位置づけについて、日本とドイツのとりわけ社会学理論と社会学史の講義を中心に確認しておく。

### 1.1 日本の大学における社会学理論と社会学史

初めに日本のどれぐらいの大学で専門分野として社会学が教えられているのかを見ておきたい。中山 (2008: 397) が指摘するように、日本の大学での社会学教育は、①「社会学という学問分野 (ディシプリン) に焦点を合わせた学科等 (社会学中心学科)」、②「中心

というほどではないが社会学関係のいくつかも科目を学べる学科等（社会学関連学科）、そして③「別のディシプリンを中心に学ぶ学生」を主な対象とした「一般教養的科目等」の三層で行われている。そのうち社会学中心学科や社会学関連学科の数は、「社会学」という名称が学科名に入っているか否かだけでは判断ができず、どこまで社会学が学ばれているかの基準もない<sup>2)</sup>。参考までに中山（2008: 397-401, 特に表1・2）が『学校基本調査報告書』からまとめた数字を挙げておくと、「社会学関係」学科の数は1958年度に8だったのが、1994年度には30となり、それ以降は特に1999年度に22学科増えるなど顕著に増加し、2006年度には90学科にのぼっている。また「社会学関係」学科に所属する学生数は、2006年度に90,101名となっている。この「社会学関係」学科は、上で言う「社会学中心学科」と「社会学関連学科」の双方に加えて、社会福祉系や情報メディア系も含む。

そこで筆者が2015年時点でインターネット上で公開されている情報から調べたところ、社会学科または社会学関係学科、加えて他学科も含めて、「社会学（sociology）」を主たる専攻に含むと考えられる学科は102校に見出された<sup>3)</sup>。その内訳は、私立大学が73校、国立大学が23校、公立大学が6校である<sup>4)</sup>。そのうち、「社会学部」がある大学はそのほとんどが私立であり、20校に及んだ（国公立大学では一橋大学のみであり、これも社会学以外を専門分野として含む社会科学部と見なしうる）。「社会学関係」学科としては、「人文社会学科」「現代社会学科」「総合社会学科」「文化社会学科」などの名称がある。また国立大学に関しては、文学部や人文学部に社会学専攻が設置されているところが多い。

その102校において2015年度に開講されていた社会学の専門科目の講義数を各大学のホームページで公開されているシラバスから確認したところ、「社会学（専門科目）」「社会学概論」「社会学原論」「社会学入門」のいずれか（以下、「社会学概論」系科目）を開講している大学は91校であり、合計197コマあった。また「社会学史」科目は42校で58コマあり、「社会学理論」科目は47校で95コマあった<sup>5)</sup>。

以上の科目を「ディシプリンとしての社会学」および「古典家」に特に関わるものとして限定し<sup>6)</sup>、そこで個別の社会学者の名前がシラバス内でどれだけ言及されているのか調べたところ、以下の結果が得られた（表1）。

最も言及されていたのがマックス・ヴェーバーであり（全体の1/3強）、それにデュルケームが次いでいる（同1/4弱）。この両者が他の学者を大きく引き離しており、シラバス上で人物名を挙げることの多い「社会学史」科目で顕著に言及されているが、他の学者と較べると「社会学概論」系科目でも取り上げられることが多い。そしてこの両者に続くのが、タルコット・パーソンズ、カール・マルクス、ゲオルク・ジンメルの名である<sup>7)</sup>。

当然ながら、「社会学概論系」科目では最も多いのが「人物名言及なし」であったように、シラバス上で記載がなくても授業内で紹介されている場合も少なくないと思われる。しかしいずれにせよ、以上のようなヴェーバーとデュルケームの両者が抜きん出ている現況は、西原・杉本（2000）の1990年代までの『社会学評論』掲載タイトルに現れた社会学者の調査や、草柳（2010）で紹介されている「社会学の教育と研究に関する調査」（2009年実施）

の「学生・大学院生時代によく読んだ社会学者」および「影響を受けた社会学者あるいはそれ以外の研究者等」の項目の結果と同様である<sup>8)</sup>。

表1 上記講義内で言及されている人物上位10名

順位	人物	合計	社会学史	社会学理論	社会学概論系
1	M・ヴェーバー	103	40	25	38
2	É・デュルケーム	86	38	14	34
3	T・パーソンズ	49	23	11	15
4	K・マルクス	45	21	9	15
5	G・ジンメル	43	24	6	13
6	R・K・マートン	32	15	6	11
7	A・コント	31	23	1	7
8	P・ブルデュー	27	9	12	6
8	N・ルーマン	27	10	14	3
10	G・H・ミード	25	12	7	6
参考	人物名言及なし	169	4	34	130
参考	対象科目数	350	58	95	197

そのヴェーバーとデュルケームがシラバス内でどのように言及されているのかを見ると、まずヴェーバーとともに挙げられている著作は『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』が圧倒的に多く、25コマにのぼる（なおかつ、5コマ以上で取り上げられているのはこの著作のみ）。そしてヴェーバーと関連づけられている語句の上位は、①資本主義（24）、②行為（20）、③宗教（18）、③理解（18）、⑤合理化・合理性（17）、⑥方法論（的個人主義）（15）、⑦社会（14）、⑧近代（13）、⑨官僚制・組織（12）、⑨支配（12）であった（カッコ内はコマ数。以下のデュルケームについても同様）。

他方、デュルケームとともに5コマ以上で挙げられている著作は、①『自殺論』（26）、②『社会分業論』（14）、③『社会学的方法の規準』（9）、④『宗教生活の原初形態』（6）であった。語句については、①社会（17）、②方法論（的集合主義）・社会实在論・社会学主義（16）、③自殺（15）、④社会的事実（12）、④宗教（12）、⑥個人（化／主義／崇拜）（10）、⑥病理・犯罪（10）、⑥アノミー（10）、⑨実証主義／科学（9）、⑨連帯（9）であった<sup>9)</sup>。

ヴェーバーとデュルケームを比較すると、どちらもそれぞれ「方法論的個人主義」や「方法論的集合主義」が語句の上位にあり、社会学の方法論の二つの極を示す参照軸として取り上げられていることがうかがえる。また各人のキー概念が「行為」と「社会（社会的事実）」に代表されているとも言える。著作としては、両者とも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『自殺論』という個別テーマを扱ったものが圧倒的に紹介されて

いるが、デュルケームは『社会分業論』など他の著作にもたびたび言及されている。

## 1.2 ドイツの大学における社会学理論と社会学史

次にドイツの大学でどれだけ社会学が学ばれているのかについて、ドイツの高等教育機関に関する情報を提供しているサイト「studieren.de」(xStudy 2018)に掲載されている情報によると、学士課程で「社会学 (Soziologie)」専攻のある大学は 37 校であった<sup>10)</sup>。

そして同サイトで履修科目概要を公開している 12 校<sup>11)</sup>の開講科目を見ると、「社会学概論」系科目が 10 校で主に第 1 学期 (1 年次の第 1 学期) に開講されているのに対し<sup>12)</sup>、「社会学理論」科目は 12 校すべてで主に第 2~4 学期 (1 年次の第 2 学期~2 年次の第 2 学期) に開講されている<sup>13)</sup>。

先の 37 校のうち、オンライン上で公開されていた 2016/17 年次のシラバスから「社会学理論」科目の内容を一部紹介すると、まずデュイスブルク=エッセン大学の社会学専攻の科目群「社会学理論」内で開講されている「社会学理論 1: 古典社会学理論」(講義)では、授業目的を「学習者が基本的な古典社会学理論に習熟すること。学習者が社会的思考の中核となる問いに対する最重要の古典的な理論的・概念的な回答を区別し、それらを社会学理論の体系的な連関の中で整序し、問題に即して応用することができるようになること」として、授業内容が以下のように紹介されている。

本講義は社会学の中心的な古典家たちを、つまりマックス・ヴェーバー、エミール・デュルケーム、ゲオルク・ジンメル、ジョージ・ハーバート・ミード、カール・マルクス、タルコット・パーソンズといった社会学を固有の学問分野として確立し形作った学者たちおよびその作品を取り上げる。…

さらにパンベルク大学の社会学専攻の科目群「社会学基礎: A1 社会学理論」に含まれる「社会学 I・II」(講義)では、授業内容の説明を「本講義は、社会構造と社会過程を社会的に分析する上での基本的な理論と概念を紹介する」と始め、途中で「本講義の第一部では、さまざまな社会のアクター (行為者) モデルを紹介し、相互に比較する。…本講義の第二部では、アクターたちの行為による共作用から産み出される、社会の構造効果に光を当てる」として、ミクロ水準からマクロ水準にまで照準を合わせると述べたうえで、こう続けている。

本講義では古典的な代表者たちと近年の代表者たち、例えばエミール・デュルケーム、マックス・ヴェーバー、ゲオルク・ジンメル、ジョージ・ハーバート・ミード、ノルベルト・エリアス、タルコット・パーソンズ、ニクラス・ルーマン、ピエール・ブルデューといった学者たちの社会学理論を関連づける。加えて特に、制度理論、社会化理論、感情理論といった新たなアプローチや合理的選択理論にも立ち入ることと

する。

そしてビーレフェルト大学の社会学専攻の科目群「社会学理論 1」に含まれる「社会学理論の歴史」(演習)は、以下のように内容が紹介されている。

本演習は、社会学理論の歴史の導入授業として理解される。中心になるのは、例えばスペンサー、マルクス、デュルケーム、ジンメル、ヴェーバー、トマス、マンハイム、ダーレンドルフ、マルクーゼらの基本的で理解しやすいテキストの講読と議論である。教員はあらかじめ、それぞれの歴史的な文脈について紹介する。

加えてフランクフルト大学の社会学専攻の専門演習「社会学的思考の主要潮流」は、以下のように授業内容が記されている。

本専門演習では、社会学の最も重要な理論アプローチたちを紹介し議論する。また本専門演習では、古典的なアプローチと著者、および著名な同時代のアプローチと著者を取り上げる。特に本専門演習で扱うのは、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの史的唯物論、エミール・デュルケームの実証主義的社会学、マックス・ヴェーバーの理解社会学、シンボリック相互作用論、合理的選択アプローチ、タルコット・パーソンズの構造機能主義理論、ニクラス・ルーマンのシステム理論、フランクフルト学派の社会学の批判理論、ピエール・ブルデューのハビトゥス理論である。

以上、ごく一部の科目にすぎないが、ドイツの「社会学理論」科目の中では、社会学理論の「古典家」に言及されており、そこにデュルケームも含まれていることが見てとれる。

しかし確認できた範囲でドイツの大学のシラバスでは、詳しい授業内容が記載されているところがなかったため、そうした「古典家」がどのように論じられているのかを、社会学教科書の中で見ていくこととしたい<sup>14)</sup>。

## 2 ドイツの社会学教科書における「古典家」としてのデュルケーム

### 2.1 ドイツにおけるデュルケーム社会学の輸入

ドイツの社会学教科書において「古典家」としてデュルケームが論じられているのかを見る前に、特にドイツおよびドイツ語圏へデュルケームとデュルケーム学派の社会学を紹介することに貢献したルネ・ケーニヒの議論を見ておきたい。

以下、Moebius (2015) によれば、ケーニヒはベルリン大学で文化社会学・芸術社会学の論考で博士号を取得した後、パリで哲学や社会学、民族学を学んでおり、その際にデュル

ケーム学派の人々、特にマルセル・モースと関わりがあった。そのパリ留学時には「現代フランス社会学の最新潮流」(König 1931/32)を記している。ナチス体制下ではスイスに移りチューリヒ大学で教授資格を取得し、第二次世界大戦後の1949年にレオポルト・フォン・ヴィーゼの後任としてケルン大学に赴任、同年に国際社会学会(ISA)の設立に参加し、1955年に『ケルン社会学・社会心理学雑誌』の編集者となるなど、戦後の西ドイツで社会学を構築した中心人物の一人とされている。そして「ケーニヒは、今日に至るまでドイツ語圏の中で最もデュルケミアンに精通した人物の一人であると見なされて」おり、特にデュルケームだけではなく「意識的に《デュルケーム学派》という表現を用い」、デュルケームの学生たちの論考をも受容した。「ケーニヒにとって第一に、デュルケーム学派の意義とは、複雑で分業と専門化を特徴とする近代社会と、そのアノミー過程による危機化についての時代診断に関するものである」。ケーニヒは1931年から1976年までに記したデュルケームに関する諸論考を併せて、『論争のエミール・デュルケーム——ドグマ主義と懐疑主義を超えて』(König 1978)という論集を公刊している。

そのケーニヒは、今日でも社会学史の教科書として用いられているディルク・ケスラー編『社会学的思考の古典家たち』の中で「エミール・デュルケーム——モラリストとしての社会学者」(König 1976)の章を記している。その章のまえがきでケーニヒは、「社会学の『古典家たち』を描く上で」真剣に受け止められるべき三つの選択肢として、第一に「関連する全作品を、その人物が生きた時代の歴史的背景のもとで、その示唆と影響を示しながら、描くこと」、第二に「古典家の作品を、存在するものとして仮定される『永遠の社会学(sociologia perennis)』に対して本来どのような貢献があったのか、という問いに関連づけて描くこと」、第三に「社会学の古典家たちの内在的あるいは明示的な哲学を描くこと」を挙げ、その中でケーニヒ自身は第一や第三の選択肢へ脱線することもあるとした上で第二の選択肢を本筋と見なしている(König 1976: 312-313)<sup>15)</sup>。そしてこの〈永遠の社会学〉にとっての意義を問うという選択肢においては「社会的行為、規範、社会化、制度化といった特定の『基礎概念』の成立を後づけ、今日の社会学の概念在庫にとっての意義を検討しなければ」ならず、そのために「批判」もまた必要となる、としている。このアプローチからデュルケームの学説を検討した研究として、自身の諸論考に加えて、タルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』を挙げている。

なおケーニヒはこの章の末尾を、このように締めくくっている。

デュルケームの偉大さは、たとえデュルケーム自身が回答を示さなかったり、あるいは少なくとも満足のいく回答を示さなかったとしても、不朽の問いを立てたことにある。デュルケームの時代制約的な部分はおおむね、今日ではおそらく意義を失っている。しかし、残っている問いの大胆さと力は、今日そして未来に及ぶデュルケームの遺産であり続けている。(König 1976: 364)

以上、ケーニヒによるデュルケームの研究からうかがえるのは、《問い》をベースとした学説の検討と、《学派》への注目という点にある。

## 2.2 社会学史教科書におけるデュルケーム

以下ではドイツの大学で「社会学史」と「社会学理論」の教科書として用いられているテキストの中で、デュルケームがどのように論じられているのかを検討することとする<sup>16)</sup>。まずドイツの社会学史のテキストから見ていく。

ヘルマン・コルテ『社会学の歴史入門』では、第四章「19世紀末におけるイングランドとフランスでの発展」で、第二節「ハーバート・スペンサーにおける初期社会学の生物学主義」に続いて第三節「エミール・デュルケームにおける初期社会学のモラリスト」が立てられている (Korte 2017: 63-75)。その節には「出自と教育」「機械的連帯から有機的連帯へ」「社会の道德についての社会学理論」「アノミーと自殺」「教育学の基礎としての社会学」の項があり、特に①フランスで初めて大学で社会学の講座(「社会学と教育学」)を設け、社会学の専門誌を創刊したこと、②近代社会における新たな道德学として社会学を構想し、その道德学の考えにドイツ留学の影響が考えられること、③教育学もまた社会学に基づくべきと考えたこと、④彼以降マルセル・モースやモーリス・アルヴァックスを中心にデュルケーム学派が形成され、デュルケームの社会学がまさにフランス的な社会学となったことなどが説かれている。主要著作としては、19世紀末のボルドー大学時代に書かれた『社会分業論』『社会学的方法の規準』『自殺論』の三冊が中心に取り上げられている。

次にフォルカー・クルーゼ『社会学の歴史』では、第三章「1890-1933 の社会学」の中で、「イタリアのエリート社会学——ロベルト・ミヘルス、ガエタノ・モスカ、ヴィルフリード・パレート」「初期アメリカ社会学——シカゴ学派とジョージ・ハーバート・ミード」「ドイツ社会学の始まり——フェルディナント・テンニースとゲオルク・ジンメル」「マックス・ヴェーバー」「ドイツ知識社会学——カール・マンハイムとマックス・シェーラー」といった節が続く前に、第一節として「フランス社会学——エミール・デュルケームとその学派」が設けられている (Kruse 2012: 75-90)。その節の冒頭では、概要として以下のよう

に説明が記されている。

エミール・デュルケームは社会学の認識対象と方法を定義した。彼の学術的業績と学術政治的な働きのおかげで、フランスで社会学が大学のディシプリンとして確立された。またデュルケームは1940年までのフランスの社会学を特徴づける学派の基礎を作った。そして時代診断的に彼が関心をもっていたのは、近代社会において人間たちがどのように統合されうるのかという問いであった。(Kruse 2012: 75)

この導入文に続いて、「エミール・デュルケームの伝記」「デュルケームと第三共和国」「デュルケームによる科学としての社会学の基礎づけ」「社会的事実としての自殺」「社会



的事実としての記憶——モーリス・アルヴァックス」 「デュルケームによる分業理論」 「近代社会における連帯」 「デュルケーム学派と連帯主義」の項が立てられている。特に伝記の項ではまずデュルケームのユダヤ教のラビを父にもつ出自とその後の教育課程が紹介され、ドイツ留学が彼のその後のキャリアを促進したとしつつ、ボルドー大学時代の三著作や『社会学年報』の創刊、ソルボンヌ大学時代の『宗教生活の原初形態』と「教育学と社会学」講座の設立が取り上げられた上で、セレストアン・ブーグレ、モース、フランソワ・シミアン、モーリス・アルヴァックスらのデュルケーム学派の人々の輩出にまで言及されている。また「デュルケームと第三共和国」の項では、デュルケームが第三共和国の支持者であったこととドレフュス事件が取り上げられ、それ以降の項では特にデュルケームによる社会的事実や集合意識の規定が挙げられている。またデュルケームによる自殺の三類型や連帯の二形態にも当然言及された上で、先に述べた「社会的事実」の応用例としてアルヴァックスの社会的記憶の議論が紹介されている。そして最後の項では、デュルケームとその学派が社会学にとってのみならず、同時代のフランスでの連帯主義運動に影響を与えたこと、そして後の1950～60年代の社会学の主要潮流である機能主義に大きな影響を与えたことの指摘されている (Kruse 2012: 89)。

### 2.3 社会学理論教科書におけるデュルケーム

続いてドイツの社会学理論のテキストにおけるデュルケームに関する記述を見ていく。

ディトマー・ブロックほか『オーギュスト・コントからタルコット・パーソンズまでの社会学理論——入門』では、第一章「18世紀までの社会学的思考の先行者たち」、第二章「19世紀における社会学の開拓者たち」に続いて、第三章「1900年頃の社会学の創設の父たち」中で、まず「エミール・デュルケーム」の節が立てられている (Junge 2012)。そこに「ゲオルク・ジンメル」「マックス・ヴェーバー」の節が続く。

デュルケームの節の序では、「社会学にとってのデュルケームの意義」として、以下のよう

に記されている。

エミール・デュルケームは、今日でも印象深い洞察、方法、問題設定を数多く社会学に遺している。本稿で言及するのは、社会学研究のための方法的規準の発展、社会学を社会統合の問題へと導いたこと、そして彼の自殺研究と宗教社会学である。それに加えてデュルケームが導入したのは、例えば社会的な規範喪失を示すアノミーといった今日まで用いられている概念や、後に社会学を哲学から分離させることにつながった道徳の社会的起源についての問いである。(Junge 2012: 109)

以下、伝記と同時代についての記述、デュルケームの考えについてのまとめがあったあと、「デュルケームによる社会学への寄与」(Junge 2012: 113-128)の項が続き、ここでは「道徳秩序としての社会」「社会学的方法の規準」「自殺の原因の類型論」「宗教」「道徳と道徳

教育」「社会的連帯の状態についてのデュルケームの診断」の項目が立てられている。そして次項「受容と影響史」(Junge 2012: 128-129)では、「社会学の古典家としてのデュルケーム」として、「デュルケームは今日の議論の文脈でも未だなお取り上げられる問題設定と理念を展開した…。総じてデュルケームは、多様な研究領域に広範な刺激を与え、デュルケームの研究との批判的な対決は今日でもなお社会学的な問題設定の拠り所を提供している」と記した上で、機能主義・共同体主義・コンフリクト理論・道徳社会学への影響を特に挙げている。そして「まとめ」では、「社会学の発展に対するデュルケームの意義」として、以下のように締めくくられている。

- ・デュルケームは他の古典家たちと同様に、社会統合の問題を社会学の認識関心の中心に据えた。
- ・デュルケームは社会的なものの本性と社会的連関の本性的な諸法則についての独自の学問として社会学を構成しうる、方法的・方法論的なカノンを発展させた。
- ・デュルケームはその方法的・方法論的な規準を、自殺研究で典型的に体现されているように、自身の経験的な研究へと模範的に移し込んだ。
- ・今日なお有意義な構想や議論、例えばアノミー概念や「契約の非契約的要素」の理念は、デュルケームの考察に由来している。
- ・最後に注目すべきは、デュルケームが社会学の社会的な有用性についての問いを投げかけたことである。彼にとって社会学は、つねにまた具体的な社会問題を設定し、社会の発展と社会問題の解決のための提起を行なう科学でもある。(Junge 2012: 129)

次にハルトムート・ローザほか『社会学理論』では、まず「社会についての独立した学問としての社会学」が19世紀末頃に成立したとして「創設の父」にヴェーバー、デュルケーム、ジンメルの名を挙げている(Rosa et al. 2013:14)。そして社会学理論は「反省としての社会学」が行う「近代の分析と時代診断」を担ってきたとして、特に「近代化の諸次元」に「順化(Domestizierung)」「合理化」「分化」「個人化」の四つを挙げ、また「近代化の諸段階」に「前期近代」「発展近代」「後期近代」の三段階を区分した上で、「前期近代」の「分化」を扱った論者としてデュルケームを参照している(Rosa et al. 2013: 71-92)<sup>17)</sup>。

そのデュルケームについて割かれた「分化1：環節社会から分業社会へ——エミール・デュルケーム」の節の序は、以下のように始まっている。

エミール・デュルケームは、タルコット・パーソンズによる受容を介して、ディシプリンの中のどの古典家よりも、社会学の自己理解を強く特徴づけている。ドイツにおけるマックス・ヴェーバー以上に、デュルケームはフランスにおいて社会学の制度化を促した。デュルケームが社会学の先達の中でも突出しているのは、科学としての社会学の確立に寄与したことのみによるのではない。デュルケームはまた、近代化の

過程を直接的に社会分化の過程として研究し、その近代化の過程を社会学の伝統の中で今日に至るまで支配的になっている観点もとで検討した。(Rosa et al. 2013: 71)

ここで言う支配的な観点とは、近代の分化のあり方を社会分業によって規定したことを指す。そして序の続きでは伝記的記述が記され、その後「主要な問い」「方法的構想——道徳物理学としての実証主義社会学」「分析——分業の諸原因と機能」「時代診断——不均衡な個人と社会」の項が続き、最後の「まとめ」ではこのように述べられている。

社会学はエミール・デュルケームにとって、社会的事実についての科学である。デュルケームによれば、科学としての社会学は、社会的事実の規則性を突き止めることに努め、その際には自然科学と同様の方法が用いられる。…社会的事実をモノのように観察するという方法的な根本規準が実証主義社会学の根本原理である。さらにデュルケームにとって中心的であるのは、社会は一種独特のリアリティ水準の一つであり、他のリアリティ水準に還元することはできない、という仮定である。したがって、デュルケームの第二の基本的な方法的規準は、社会的なものは社会的なものによってのみ説明されうる、というものである。その際にデュルケームは、社会的事実の独自性を方法的原理としてのみならず、社会は個人の意志から独立した力をもつという意味で理解している。

したがって、…その説明の基底的な単位は、デュルケームによれば社会の分化形態である。デュルケームは近代社会を第一に分業社会と特徴づけた。(Rosa et al. 2013: 91)

#### おわりに——デュルケームにみる現代社会学における「古典家」の位置

本稿で取り上げたドイツの社会学史と社会学理論の教科書の中で主に示されていたのは、デュルケームがフランスにおける社会学の制度的確立に寄与したこと、社会的事実に関する社会学の方法論的なカノンと、社会統合の問題という今日に至る問いを提起し、そして社会理論の構成要素として分業の型を位置づけたこと、そして近代的な道徳学および道徳教育の基礎に社会学を据えたこと、であった<sup>18)</sup>。

したがって、本稿ではごく一部の素材しか取り上げることができなかったが、さしあたりドイツの社会学教育における「古典家」としてのデュルケームは、影響史と問題史の双方によって古典家としての位置づけが規定されている、と言えるかもしれない。つまり、今日に残るディシプリン内での制度的な影響力とディシプリンに特有の問題設定が「古典家」を学ばせる上での誘因と考えられていると示唆される。そして当然ながら、制度的な影響力が残るためにも、学ぶべき問題があることが重要であると考えられる。「古典家」による問題提起もまた、今日に問い直すことでこそ現代的な意義をもつ。

[注]

1) Connell (1997) が記すように、社会学教科書の多くが「創設の父」や次の世代の人々の「古典理論」に言及しある種のカノンとして扱っているが、それがあくまで後代からの分野劃定のための回顧的な創作であって他の議論を忘却させる働きをもつ点は、あらかじめ留保しておきたい。また Nisbet (1966: 3-4=1975: 1-2) が社会学史の出発点として、①人物、②体系、学派や主義という二つの選択肢以外に、③体系の要素をなす観念(アーサー・O・ラヴジョイより)を挙げていたことも想起されたい。

2) 中山 (2008: 400) はこの点について、「大学設置基準大綱化後の学部・学科再編ブームの結果」としての「学科分類の破綻」を指摘し、複数ディシプリンに立脚した学科における個別ディシプリンごとの専攻学生数や占有率がわかるようにすべきとしている。

3) 以上まず①Knowledge Station 日本の大学(インサイトインターナショナル、掲載大学758校、<http://www.gakkou.net/daigaku/>)で学問分野「社会学」、学問系統「社会学」(140校該当)、次に②学校法人情報検索システム(<http://meibo.shigaku.go.jp/top>)で学部または学科「社会学」(各105件、176件該当)、そして③「Google」(<http://www.google.co.jp/>)で「大学 社会学」を検索した。それらの検索結果からさらに各大学ホームページを確認した。そのうち「社会学(sociology)」専攻を含む学部・学科のみカウントし、社会学を主たる専攻に含まないもの(社会福祉系専攻のみ、大学院のみも)を除外した。

4) まず私立は(以下、「大学」略)、愛知、青森、江戸川、追手門学院、大阪経済、大阪大谷、大谷、大妻女子、沖縄国際、関西、関西学院、関東学院、京都女子、京都文教、近畿、慶應義塾、皇學館、甲南、甲南女子、神戸学院、神戸女学院、神戸山手、駒澤、札幌大谷、四国学院、実践女子、四天王寺、尚綱学院、上智、昭和女子、聖カタリナ、成蹊、成城、専修、創価、筑紫女学園、千葉商科、中央、中京、帝京大学、東京情報、東京女子、同志社、同志社女子、東北学院、東海、東洋、常盤、名古屋学院、奈良、日本、日本女子、ノートルダム清心女子、広島国際学院、広島修道、佛教、文京学院、法政、北陸学院、松山、武蔵、明治、明治学院、明星、目白、桃山学院、立教、立正、立命館、龍谷、流通経済、和光、早稲田、次に国立は、茨城、大阪、岡山、お茶の水女子、九州、京都、熊本、神戸、静岡、島根、信州、千葉、筑波、東京、東北、富山、名古屋、奈良女子、一橋、福島、北海道、山口、琉球、そして公立は、大阪市立、大阪府立、首都、都留文科、名古屋市立、福岡県立であった(いずれも2015年度時点)。上記以外にも「〇〇社会」学部/学科が22校で見出されたが、社会学専攻が確認できなかったため除外した。ただし、筆者が各大学ホームページの記載から判断したものであり、見方によって誤差がありうる(なお、2016年度以降にも「社会学部」や「社会学関係」学部・学科の新設・改組が複数あった)。

5) 「社会学史」科目には、「社会学説史」「社会学のあゆみ」「社会学思想史」などを含む。ここに関連して、1966~2005年度の24大学28学部・学群の社会学系学科・専攻における「社会学史」科目の変遷について大黒屋(2010)を参照のこと。また「社会学理論」科目には、「社会理論」「理論社会学」に加えて、「社会システム論」「相互行為論」といった個

別理論科目、さらに「社会学理論特殊研究」といった社会学理論を明記している特殊講義を含む。他にも「社会学理論と社会システム」は資格科目を兼ねており、内容としては「社会学入門」科目と見なしうる場合も多いと思われるが、便宜上「社会学理論」科目に含めた。「社会学入門」科目には「社会学基礎」「基礎社会学」などを含み、「社会学（専門科目）」には教養科目を含めていない。そしてコマ数について、通年科目および履修登録上の問題で同一内容のシラバスが複数存在する科目も、一コマとして数えている。以上、科目名だけでは判断ができない場合もあるため、分類に際してはシラバスの内容も参照した。

6) したがってここでは、①「講読（外書講読含む）」、②「演習」、③「特殊講義」、④領域社会学（例、家族社会学、宗教社会学など）、⑤「社会調査」系科目は除外した。

7) 11位以下は、⑩E・ゴフマン（24）、⑩J・ハーバーマス（24）、⑬A・ギデンズ（22）、⑭M・フーコー（20）、⑮H・スペンサー（18）が続く（以上、丸括弧内は言及コマ数）。

8) 西原・杉本（2000: 313-322）によれば、1950～1990年代に『社会学評論』に掲載された論文タイトルに現れた人名の上位三名は、①ヴェーバー（32本）、②デュルケーム（23本）、③パーソンズ（18本）である（タイトルに人名を含む論文202本中）。また草柳（2010: 124-125）によれば、主に日本社会学会会員を対象とした質問紙調査「社会学の教育と研究に関する調査」による「学生・大学院生時代によく読んだ社会学者」の上位三名は、①ヴェーバー（78人）、②デュルケーム（30人）、③R・K・マートン（24人）であり（有効回答数543）、「研究において影響を受けたと思われる社会学者」等の上位三名は、①ヴェーバー（34人）、②マルクス（21人）、③デュルケーム（19人）であった（有効回答数539）。

9) 語句について、「社会学」や「社会（学）理論」といった一般的な表現は除いた。

10) 「社会学（Soziologie）」専攻がある大学は、①ハレ＝ヴィッテンベルク、②ライプツィヒ、③デュイスブルク＝エッセン大学デュイスブルクキャンパス、④フライブルク、⑤フランクフルト、⑥ダルムシュタット工科、⑦ハンブルク、⑧ミュンヘン、⑨イエナ、⑩エアランゲン＝ニュルンベルク、⑪ポツダム、⑫ライン＝ヴェストファーレン・アーヘン工科（Technische Hochschule）、⑬バンベルク、⑭バイロイト、⑮ビーレフェルト、⑯ブレーメン、⑰ケムニッツ工科、⑱ドレスデン工科、⑲デュッセルドルフ、⑳アイヒシュテット＝インゴルシュタット・カトリック、㉑ギーゼン、㉒ゲッティンゲン、㉓ハノーファー、㉔ハイデルベルク、㉕カッセル、㉖キール、㉗コブレンツ＝ランダウ大学コブレンツキャンパス、㉘コンスタンツ、㉙マインツ、㉚マンハイム、㉛ノルトライン＝ヴェストファーレン州立ヴェストファーレン・ミュンスター、㉜オスナブリュック、㉝ロストック、㉞トリアーア、㉟チュービンゲン、㊱グスタフ・ジーベルト（Akademie）、㊲ベルク・ヴッパータールであった（以上、Hochschule と Akademie の記載がないものは Universität を指す。以下同様）。また、上記以外で名称に「社会学」を含む学士課程は、ツェッペリン経済・文化・政治（「社会学・政治学・経済学」）、ハーゲン通信（「政治学・行政学・社会学」）、ベルリン自由（「社会学——ヨーロッパ社会」専攻）、ベルリン工科（「工学系社会学」）の4校で見出された。加えて、同サイトでキーワードを「社会学」として検索すると131校（修

士課程、教職課程も含む) が該当し、名称に「社会学」を含まないが主たる内容に社会学を含む学士課程をもつ大学もあると考えられる。

11) 注10に挙げた大学のうち、①②③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫の12校である。

12) 「社会学概論」系科目には、「社会学概論」「社会学の基礎概念」「社会学入門」「社会学基礎」などを含む。ただし「社会学概論」系科目のなかった2校も、「導入」(⑤)と「社会学理論入門」(⑩)で同様の内容を扱っていると考えられる。

13) この「社会学理論」科目には「社会学理論入門」を含む。他に社会学理論の発展科目や個別科目、演習も開かれている。他方、12校で「社会学史」科目は見出されなかった。

14) 以下ドイツの大学で教科書として用いられているテキストの記述を見ていくが、その前提として「ディシプリンの場で支配的な考えを再生産する上で教科書が果たす保守的な役割」と「教科書社会学 (textbook sociology)」と呼びうる独特の領域について Manza et al. (2010) を、またディシプリンとしての社会学と教科書との関わりについて小川 (2017) と日本の社会学教科書におけるデュルケム受容について白鳥 (2017) も参照のこと。

15) ケーニヒのこの議論に関連して、同論考所収『社会学的思考の古典家たち』のケスラーによる編序「社会学的言説の『古典家たち』」(Käsler 1976: 14-16) の項も参照のこと。

16) 以下は1.2で言及した37校のシラバスの中で挙げられたテキストから選んでいる。

17) 同書以降では発展近代の分化を扱った論者としてパーソンズとルーマンが、後期近代の分化を扱った論者としてM・ハートとA・ネグリが取り上げられている。

18) 道徳学と道徳教育への注目は、少なくとも日本と比べた場合のドイツでのデュルケム言及の特徴と言えるかもしれない。その半面として、デュルケムがドイツ留学で学んだことへの関心もあると考えられる (cf. Durkheim 1887=1993)。

#### [文献]

Brock, Ditmar, Matthias Junge und Uwe Krähnke, 2012, *Soziologische Theorien von Auguste Comte bis Talcott Parsons: Einführung*, 3. Auflage, München: Oldenbourg.

Connell, R. W, 1997, "Why is Classical Theory Classical?," *American Journal of Sociology*, 102(6): 1511-1557.

Durkheim, Émile, «La science positive de la morale en Allemagne», *Revue philosophique*, 24: 33-58, 113-142, 275-284. (=1993, 小関藤一郎・山下雅之訳「ドイツにおける道徳の実証的科学」『デュルケム ドイツ論集』行路社, 81-162.)

Junge, Matthias, 2012, »Emile Durkheim«, Ditmar Brock, Matthias Junge und Uwe Krähnke, 2012, *Soziologische Theorien von Auguste Comte bis Talcott Parsons: Einführung*, 3. Auflage, München: Oldenbourg, 109-131.

Käsler, Dirk, 1976, »Einleitung«, Dirk Käsler (Hg.), *Klassiker des Soziologischen Denkens, 1. Band: Von Comte bis Durkheim*, München: C. H. Beck, 7-18.

- Krähnke, Uwe, 2012, »Über das Lehrbuch«, in: Ditmar Brock, Matthias Junge und Uwe Krähnke, *Soziologische Theorien von Auguste Comte bis Talcott Parsons: Einführung*, 3. Auflage, München: Oldenbourg, 5-9.
- König, René, 1931/1932, »Die neuesten Strömungen in der gegenwärtigen französischen Soziologie«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 7: 485-505, 8: 210-224.
- , 1976, »Emil Durkheim: Der Soziologe als Moralist«, Dirk Käsler (Hg.), *Klassiker des Soziologischen Denkens, 1. Band: Von Conte bis Durkheim*, München: C. H. Beck, 312-364.
- , 1978, *Émile Durkheim zur Diskussion: Jenseits von Dogmatismus und Skepsis*, München und Wien: Hanser.
- Korte, Hermann, [1992] 2017, *Einführung in die Geschichte der Soziologie*, 10., ergänzte und aktualisierte Auflage, Wiesbaden: Springer VS.
- Kruse, Volker, 2012, *Geschichte der Soziologie*, 2. Auflage (1. Auflage, 2008), Konstanz: UVK.
- 草柳千早, 2010, 「活動としての社会学、その構成過程への一視角」那須壽編『知の構造変動に関する理論的・実証的研究』2007～2009年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書, 111-137.
- Manza, Jeff, Michael Sauder and Nathan Wright, 2010, “Producing Textbook Sociology,” *European Journal of Sociology*, 51(2): 271-304.
- Moebius, Stephan, 2015, »René König: Zentrale Figur der westdeutschen Nachkriegssoziologie«, (Retrieved 12/4/2018, from: <https://soziopolis.de/erinnern/klassiker/artikel/rene-koenig/>)
- 中山伸樹, 2008, 「社会学教育改革のための基礎枠組みとしてのプロフェッション論（特集 社会学教育の現代的変容）」『社会学評論』58(4): 395-414.
- Nisbet, Robert A., 1966, *The Sociological Tradition*, New York: Basic Books. (=1975, 中久郎監訳『社会学的発想の系譜』I・II, アカデミア出版会.)
- 西原和久・杉本学, 2000, 「日本の社会学——『社会学評論』にみる理論社会学の五〇年」『情況』第二期, 11(7): 305-327.
- 小川伸彦, 2017, 「ディシプリン／教科書関係論のために——社会学入門テキスト分析における対象書目抽出方法論」『奈良女子大学社会学教育研究論集』1: 17-28.
- 大黒屋貴稔, 2010, 「『社会学史』科目にみる学知の変遷——『地域史』から『通史』へ」那須壽編『知の構造変動に関する理論的・実証的研究』2007～2009年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書, 44-54.
- Rosa, Hartmut, David Strecker, und Andrea Kottmann, 2013, *Soziologische Theorien*, 2. Auflage (1. Auflage, 2007), Konstanz: UVK.
- 白鳥義彦, 2017, 「テキストから見るデュルケム受容」『神戸大学文学部紀要』44: 89-107.
- xStudy, 2018, »Liste der Hochschulen nach Postleitzahlen: Soziologie«, in: studieren.de, (Retrieved 7/11/2018 from: <https://studieren.de/soziologie.hochschulliste.t-0.c-401.html>)
- (うめむら むぎお 日本学術振興会特別研究員-PD)